

MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第46号 2018年 3月

もくじ

環境カウンセラーESD学会平成29年度研究大会	一條美智子
H29年度MECC環境施設見学会	保坂 公人
食品ロス対策！ 防災備蓄食品、活用給食	山田 怜奈
新入会員紹介	山田 怜奈
田んぼ・里山、水辺の生きもの調査の近況報告（直近1年）	林 鷹央



1) 見学した利根川取水閘堰と沈殿池、導水路



2) 取水堰魚道の断面から見た遡上する鮭
撮影：保坂公人

環境カウンセラーESD学会平成29年度研究大会

理事 一條 美智子

2月18日(土)新潟薬科大学において特定非営利活動法人環境カウンセラー全国連合会主催の環境カウンセラーESD学会・第一回全国大会が開催されました。

学校及び地域におけるESD(SDGsを含む)さらにその発展としてのSDGsの普及を目的として、協同的な学び支える指導者の養成及びESDを推進するために学習指導書の作成、ESD指導者としての資質の向上を図る等、具体的な目標があげられています。当日の流れとしては、10時開会・寺木委員長あいさつ後、会場を移動し、二分科会[会場NE301/NE302]に分かれて研究発表・質疑応答がそれぞれの会場で7コマずつ進められました。広域な興味を引く課題がたくさんありどれも聞きたかったですが、

二会場に分けられ半分は聞けず、残念でした。

昼食をはさんで午後から記念講演「環境カウンセラーが推進するESDとSDGs」を新潟県県民生活・環境部副部長小林哲也氏から75分頂きました。

14:30からNE401会場でパネルディスカッション「環境カウンセラーが進めるESD(SDGsを含む)の未来」がコーディネーター寺木氏、パネラー・佐々木理事長・依田近畿大学教授・久保田先生・一條で開かれ、それぞれの立ち位置から現状・これからの見解を始め、幅広い課題が出されました。



続いて設立記念イベント《未来の持続可能な社会をイメージする力を競う！バックキャスティング・アワード2018》プレコンテスト受賞発表式が行われました。論文コンテスト応募は中学生から大学院生まで13名で、グランプリ1名、準グランプリ5名、奨励賞等の授賞式がとり行われ、全ての予定は定刻の16時に無事完了いたしました。



なお総会が急遽短時間開催され、寺木会長・依田副会長・久保田副会長・庄司事務局長・小長谷実行委員会事務局他が承認されました。ESDが環境カウンセラーの専門領域であるという主張に学会の存在は欠かせないものとして、平成30年度に第二回全国大会を引き続き関東で開催することが決まりました。一條につきましては、MECC会員として皆様の応援とお力添えを頂きながらESD環境教育委員長として引き続き何とか頑張ります。宜しく願い致します。

H 2 9 年度 M E C C 環 境 施 設 見 学 会 報 告

2017年11月22日 利根川取水堰・忍城(埼玉県行田市)

参加者：望月眞・若林高子・藤井健史・山田怜奈・宇野哲夫・著者(敬称略)

保坂 公人

利根大堰は埼玉県行田市と群馬県邑楽郡千代田町の県境にあります。河口から145 km上流に昭和36年に建設され、(独法)水資源機構が管理しています。

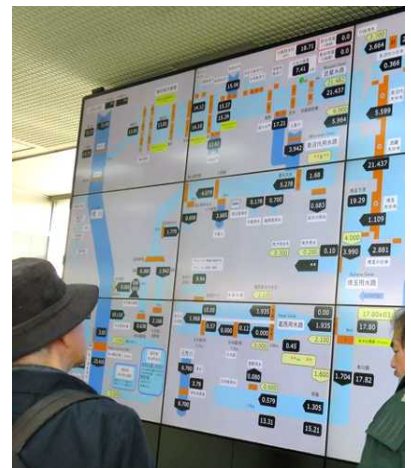
管理事務所は右岸の行田市にあります。職員の山田さんに出迎え頂き丁寧な説明を頂きました。見学には大勢の小学生も来ていて大変賑やかでした。まずは屋上にて全体の俯瞰をしました。下流を見ると左手に水門の列が対岸までずーっと長くなっています。全体の長さは700 m弱で水門は12門、魚道は3箇所、事業所のある右岸では魚道の断面を見ることができます。

右手には取水した水の沈殿池があって導水路に繋がっています。沈殿池の幅は取水口よりずっと広く、流速をグンと落とすことで土砂の沈殿を促します。流速0.4 m/sで水深は4.5 mです。各方面への導水路は下流側から邑楽用水路、埼玉用水路、武蔵用水路、見沼代用水と行田浄水場の取水口となっています(口

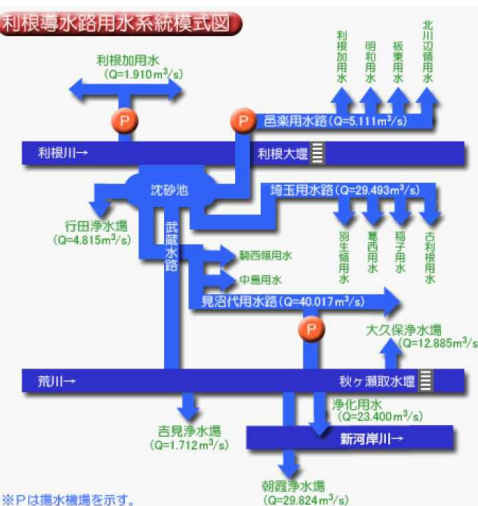
武蔵用水は利根川と荒川を結び、秋ヶ瀬取水堰や朝霞水路で取水され東京の水道水となります。また、隅田川の水量を増し、汚れの緩和用にも使われています。他の水路の内、行田浄水場に行く水以外は主に農業水です。ちなみに荒川は利根川より水位が8m低いそうです。

興味深かったのは導水路の並び方です。武蔵水路と見沼代用水はどこかでクロスしなければいけません。武蔵水路は荒木のサイフォンで見沼代用水の下を潜っています。調べてみると荒川に辿り着くまでに上星川・秩父鉄道・国道125号線・元荒川・足立北部排水路の合計6ヶ所をサイフォンで渡っていることが分かりました。なので武蔵水路は大雨や緊急時には送水を止めてしまうとのこと。普段なんとなく見ている風景も見学会で触発されると変わって見えるものですね。

見沼代用水を見るとこちらはもっと凄いことになっていました。享保13年(1728)徳川吉宗の時代に農業用水として開削され、3年後に閘門式運河の見沼通船堀が作られました。利根川からの荷物を江戸に運ぶため、平行する芝川との3mの落差を解消する閘門です。享保のパナマ運河です。今回見学会の報告任務を頂いて、知的好奇心がどんどん広がりました。



一目では把握しきれない情報満載の大画面パネル



絵1参照)。邑楽用水は逆流して利根川の下を配管で渡ります。対岸にポンプ井があって、そこから圧送されています。他の水路は自然流下です。

屋上の見学後、取水堰をコントロールする操作室に案内されました。3階の鍵付きの部屋で土足では入れません。24時間体制で水位の調整をしています。大画面パネルには水源ダムから下流までの関連河川の水位、気象情報など沢山表示されていて一目では全く把握できません。この膨大なデータを睨みながらゲートの水位の調整を行っています。部屋の中には5～6名しか居ません。調整作業は自動ではなく手動。そして気象情報も常時更新され、「あの地域に雨が降ると何時間後に何センチ増水する」などと瞬時に理解してゲートをコントロールしているそうです。それも cm 以下の精度だそうです。

通常のご案内より時間を沢山使って頂いたようで、案内役でない技術系の方も我々の好奇心に答えて下さいました。まさに感謝です。

見学後、利根川堤防を越えて魚道の断面を見に行きました。「遡上する鮭や鮎が観察できる」との記載通り、ガラス越しに越流堰を見ていると数分もしない内に鮭が現れ、皆感激です（口絵2参照）。10分しないうちに2尾を確認しました。

予定時間を大分オーバーした取水堰見学で、バス移動を取りやめタクシー移動とし、「のぼうの城」で有名になった忍城の見学は昼食後となりました。

忍城は行田市郷土博物館に併設されている鉄筋コンクリート造の3層復元建物です。博物館の中は古代から現代までの行田の歴史が詰まっています。古代の行田は埼玉古墳群でも分かるように、繁栄していた所です。徳川家康が江戸城に入るまでは荒川と利根川に挟まれた自然堤防のあるこの地域の方が江戸よりはるかに繁栄していたはずです。

15時少し過ぎに見学を終了して路線バスで吹上駅より東京方面に向かい順次解散しました。



今回の参加メンバー。左から宇野・若林・望月・藤井・保坂・山田（敬称略）

食品ロス対策！防災備蓄食品、活用給食

山田 玲奈

自治体や事業所で保管されている防災備蓄食品の大半は賞味期限を迎え、買い替え時期には焼却処分されます。事業系一般廃棄物として処理されているため、実態が把握しづらいのが現状です。しかし食品ロスの中でも防災備蓄食品は、一定の量がまとまって処理されるため一元管理しやすいのが特徴です。

焼却処分を行わず、循環型社会の形成のために役立てるような有効活用策はないものかと、2016年度、自治体が保管していた防災備蓄食品を福祉施設やフードバンク、子ども食堂へ寄贈する活動に取組みました。2017年度は、もっと多くの方にこの問題を捉えて頂きたいと、一部の賞味期限前の防災備蓄食品を、環境や防災の意識啓発に活用する取組の他、更に一步踏み込んで、教育現場で「生きた教材」して学校給食や家庭科の授業で活用する取組みを行いました。これは、子どもたちに「食の大切さ」を伝えたいという強い熱意をもった栄養教諭・学校栄養職員・調理師の先生方と、文化・環境にかかわる食育に取組む任意団体：いただきますinfo（事務局：三信化工（株））を中心に、ご活躍頂けたことで実現いたしました。

環境への影響算定と教材開発は、資源と環境の教育を考える会『エコが見える学校』およびみずほ情報総研に協力いただき、2017年11月～18年2月までに都内6校（小平六・三谷・梅島・忍岡・大宮・松庵）の小学校・高校で開催できました。

食品ロスや防災への意識啓発として、子どもたちに楽しみながら伝えられると同時に、実際に食べながら何を感じてもらえるか、限られた時間の中で多くのメッセージを伝えるには、様々な分野の専門家や機関の連携が必要だと感じております。MECC会員として、循環型社会の形成のため「発生抑制」に注目頂き、多くの方に賛同いただけるよう今後も活動して参りたいと思います。



チョコチップパンを使用
した林檎風味サフラン



白粥とクラッカーを使用
したトマトリゾット

新入会員紹介 山田玲奈

鹿児島県生まれ、父の転勤に合わせて転校を繰り返しながら、千葉で育ち東京に来ました。

入会は昨年度環境施設見学会(日鉱記念館と日立製作所大みか事業所訪問エコツアー)に参加したのがきっかけです。MECC、SECA、エコアップ協議会よりご参加された17名の先輩方にお会いし、環境問題の様々な側面を知りました。月例会は、毎回理解と経験が深まるとても楽しい会で、次の開催を待ち遠しく感じました。

昨年度より「食品ロス」を皮切りに、賞味期限前の食品を学校給食や福祉施設で有効活用する取組に従事しています。また、環境問題の意識啓発として子どもたちへ「環境教育」としての「食品ロス」を伝える方法を模索しています。皆様のご指導をいただきながら勉強させて頂ければと思います。



田んぼ・里山、水辺の生きもの調査の近況報告(直近1年)

生きもの認証推進協会 林 鷹央

COP10 愛知(第10回生物多様性条約締約国会議)では2020年に向けて生物多様性向上という目標が掲げられました。あれから8年、関係団体は地道な活動を続けるも、原発事故に農薬問題、水路のコンクリート化や田畑の埋立、耕作放棄に人工林の放置、T P P と自然環境が壊れていくスピードの方が早く感じられる現在ではありますが、「田んぼの生きもの調査」を中心とした水辺の生きもの関係の近況報告をいたします。

MECCとのご縁で国分寺市の「環境アドバイザー」として登録され、2017年10月に「ザリガニ捕獲大作戦」という外来種対策の講師を「姿見の池」で務め、その模様はJCOMニュース「どローカル」にて放送されました。今回は前年に比べ捕獲数も少なく、あまり大きな個体も採れていないとのこと。市が継続して駆除している成果が出ているようです。普段は立入禁止の水路をこの機会に網で軽くすくってみたところ、カゲロウ類の幼虫にヨコエビやヌカエビの仲間が入りました。



JCOM ニュース「どローカル」より

生物多様性条約といえば、昨年は生きもの調査担当で関わっている川崎市と小田原市の団体が「国連生物多様性の10年プロジェクト」の認定事業になったりもしました。毎年人が集まり、田んぼ作業や生きもの調査を行い持続している活動は、それ自体が生きものを育むことにもつながります。

田んぼがなくならないよう地味ながらも持続していくことが重要だと感じ、全国各地の田んぼへ出張し、生きもの調査の講師をしております。

ちょっと変わった活動としては、「^{ひゃくしょういっき}百生一喜」というバンドを組み、生物多様性ソングを演奏することがあります。朝市やオーガニックシンポジウムでライブをやったり、林家カレー子さんにコーディネートしていただき、西久保コミュニティセンターで歌を織り交ぜた環境講座をさせてもらったことがあります。私はボーカル担当なのですが、学校の講義などでは伴奏者がいない時は、自分でギターやウクレレを、時々間違えたりしながら弾いています。

今年、力を入れたい活動として「田んぼを食べるプロジェクト」(通称TTP)があります。MECCの先輩方からは貴重な野草や小動物・昆虫などを食べたお話を教えていただき、大変勉強になっています。

MECC会員の皆様、今後ともお知恵お貸しください!

編集後記 当会メンバーである林家カレー子様の相方ライス様が2月24日に逝去(享年76歳)されました。ライス様には当会の環境施設見学会等にも参加して頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

発行者：NPO 武蔵野多摩環境カウンセラー協議会(MECC)事務局
〒180-0011 東京都武蔵野市八幡町3-1-1 稲田 昂
TEL：042-646-3822
ホームページ：<http://www.mecc.or.jp/>

編集者：望月 眞